

# 室町時代の貨幣経済

The monetary economy in the Muromachi era

三 上 隆 三  
Mikami, Ryuzou

## ABSTRACT

Section①Muromachi of Muromachi-Bakufu is simple name of a street in Kyoto. ②Ashikaga Yoshimitsu laid foundation for monetary economy and imported many copper coins from China. ③Dosoh is banking business. ④Dosoh developed himself from non-bank to bank by gosen. ⑤Goldsmith was very artiful but sly. ⑥Many Koreans knew the monetary economy in Japan. ⑦The monetary economy in Japan was supported by copper coins of China. ⑧ Shortage of copper coins produced Bitasen.

## 一 室町時代の室町とは

室町幕府の存在からその時代を一般に室町時代とよんでいる。それは当然のことであって、あえて異とするには当らない。しかしここに若干の解説をつけておく必要がある。というのも以下の理由による。

鎌倉幕府とか江戸幕府はそれぞれが開府した都市名をとっている。そのひそみにならうのなら、足利氏の幕府名は、開府地が京都であるから、当然に京都幕府となるべきはずである。流石の足利氏も、とにかく桓武天皇以降、朝廷のありつづく京都という都市名を採用することにいささかの遠慮と疑問をもったものと思われる。

とはいえ名無しの幕府などありえないわけで、当然に名称を考え出さなければならぬ。このような経路で辿りついたのが幕府の存在地名、より正確には

一地点名，ということになったわけである。上杉本「洛中洛外図」に姿を見せているように，花の御所ともよばれる，当時の社会にあって壮麗壮大な幕府の室町第とよばれる建造物は，京都を南北に貫通する室町通の室町頭<sup>ムロマチガシラ</sup>＝室町通りの北の端ともいえる位置にあったからである。

ところで京都の街を形成する通りの名称には，周知の通り三条・四条といった大路——路幅も広く，次に述べる小路<sup>コウジ</sup>の倍はあった——に対し，錦小路<sup>ニシキコウジ</sup>・綾小路<sup>アヤノコウジ</sup>の名称そのものが有力に語っているように小路があって，その大路小路が縦横に交叉していた。大体のところ大路一本に対し小路三本が存在した。室町はその当時では無名に近い一小路名にすぎないのである。鎌倉・江戸幕府の名称に比し，名称からいって室町幕府は京都の単なる一小路名を採用しているという意味で特異な存在といってい。とまれこの室町時代に入るや，前稿で述べた鎌倉時代・南北朝時代に抬頭し，流通しはじめた貨幣の普及は素晴らしく，商業の大勃興期と相乗しながら本格的貨幣経済が成立するのである。その集中的表現が京都に見だされた。以下その具体的考察をすすめたい。

## 二 日本国王・源道義の狙い

まず叙述進行の前提として，南北朝時代の対立した朝廷の性格から考察をはじめよう。実物経済・農業中心の米重視思想＝儒学思想の持明院統の花園天皇に対し，貨幣経済思想をもつ大覚寺統の後醍醐天皇は政権の座につくや，日吉社・春日社<sup>ジニン</sup>・石清水八幡宮の神人でもあった京商人<sup>クゴニン</sup>を供御人として直属させ，貨幣を献納させた。一方，高利貸化していた酒屋にも課税して貨幣を入手した。他方では地頭の所領からの収入＝米を貨幣に換算して，その20分の1を税として徴収した。鎌倉の北条幕府のとった貨幣経済思想を承継しその前進をはかるものともいえる。このようにして入手した貨幣はこれを御倉と称する土倉<sup>ドソウ</sup>にわたし財政業務を担当させた。宮殿造営のためともいわれる銅錢・乾坤通宝の鑄造や楮幣＝紙幣の発行計画もあった。

長い南北朝時代——その対立・抗争の長さの原因の1つに京商人は両朝に貨

幣を献上してどちらの政権下になっても安全を得たいとしたためともいわれている——の戦争で経済が疲弊しているのを復活させるため、政権を手にした足利尊氏は建武3＝1336年に、幕府の理念・目標を示す建武式目なるものを制定した。その第6条には「可被興行無尽銭土倉事」と宣告して金融業者の保護・育成＝貨幣経済の発展をはかり、それを念願した。

幕府の上からの行政力による支援もあって貨幣流通も本格化し、遂に室町時代の日本に本格的な貨幣経済が、それも単なる貨幣の流通する貨幣経済ではなくて、世界的水準をゆく貨幣経済社会が実現する。そしてその具体的基礎を作ったものこそ、祖父・尊氏の路線を前進させ、幕府の権勢をピークにまで充実させた三代将軍の義満である。もとよりそのためには日本全国を掌握しなければならないのだが、幕府は義満以降には張子の虎とか借りてきた猫と評されるにいたるほどに行政力・権力を失うのである。幕府の全盛期<sup>ピーク</sup>の義満時代にもそのかげりが見られるわけで、日本の歴代全幕府の中にあって一番権力のなかったものといってもよいであろう。具体例としては、山陰地方の有力守護大名の山名氏を牽制するため、至徳3＝1386年以降に前後六回も天橋立にまで出陣しなければならなかった程である。

その義満は38才＝応永元＝1394年12月に将軍職を義持にゆずると同時に出家し、法名を源道有とし後に源道義と改めた。道有号は主として入手の南宗画の所有印号として使用したという。行政等の拘束からの一応の解放＝自己意志の実行・実現のため、大きくは武家＝権力と公家・天皇＝権威の両者の入手をはかるのである。そのために次男・義嗣の天皇化を視野に入れて応永15＝1408年に元服をあえて内裏<sup>ダイリ</sup>で行うことによって親王化した。その上で自分の法皇＝上皇になろうとこころみだ。これは単純な一個人の欲望という性格のものではなかったようだ。というのは明国<sup>ミン</sup>との国交にあたって、明皇帝に出す書に日本国王と署名することを求められたからであるという。

中国との交易における当時の実体は朝貢貿易であったが、明国との勘合貿易船1隻につき現在の10億円以上の収益があったという。この収益入手のために

は、何よりも先ず明王による義満の日本国王に封冊・公認を得ることが必要である。

自分の姓名を中国式の源道義と称し、応永 8=1401 年に僧祖阿・肥富某を遣明使として派遣し、ようやく和寇の取締り等とともに念願の日本国王に認められる勅書（相国寺蔵）が永楽 2=応永 11=1404 年にとどいた。ここに勘合貿易による収益によって幕府の財力強化が可能になった。

貿易収益の一部を支出して、義満は京都とその周辺=洛中洛外の土倉・酒屋等の金融業を明德 4=1393 年に幕府の一元的保護・支配下におさめた。14 世紀初頭の京都には約 300 余の土倉があり、その 80 パーセントが延暦寺等の権門勢家の被官が経営にあたっていた。両者の関係・既特権のすべてをこれによって否定・断絶したのである。他方では年額として総額 6000 貫（貫とは銅銭千枚）の酒屋土倉役（<sup>エキ</sup>=税）の徴収と引換えに、その他の一切の臨時課役を免除した。かくて祖父尊氏の「可被興行無尽銭土倉事」路線を義満が具体的にふみ出し、室町時代の貨幣経済の基礎を確立した。

表現をかえれば勘合貿易による中国銅銭の独占的輸入によって貨幣流通の拠点たる土倉等の活動を本格化し、同時に政所の費用（<sup>マンドコロ</sup>）=幕府財政の貨幣化=土倉役への全面的依拠へのバイアスを強化・両者の一体化的関係を確立した。かくてここに幕府による中国銅銭の輸入強化にもとづく室町時代の世界水準をゆく貨幣経済実現への幕が揚げられるのである。

### 三 有徳人と金融業

『経済理論』前号の拙稿「わが国の無貨幣経済時代とその解体」において紹介しておいたことなのだが、吉田兼好は『徒然草』60 段において、芋頭好きの僧を有徳人とよんだ。<sup>イモガシラ</sup>兼好は文字通りモラルをそなえたすぐれた人物・徳を積んだ人を有徳人としたのである。<sup>ウトクジン</sup>

室町時代に入ると、銭持ち=金持ちのことを羨望心とともに皮肉をこめて、<sup>ウトク</sup>有得人=<sup>ウトク</sup>有徳人とよんだ。文字通り「徳ハ得ナリ」（<sup>ライキ</sup>『礼記』『楽記篇』）である。

そしてそれらの金持ちから徴収する臨時税は、これを有徳人からとるということから有徳税といった。徳銭・有徳銭ともいう。そして有徳人とよばれるのは単なる金持ちだけではなく、それを元手に出現した多くの<sup>ドソウ</sup>土倉経営者たちもその中に加わるのである。

藤原定家は有名な彼の日記『明月記』の天福2=1234年8月5日条で、東西は烏丸・油小路間と南北で七条坊門・八条坊門の四角形地帯——大体のところ現JR京都駅の地と考えられたい——を全焼する火災発生を記して「土倉員数ヲ知ラズ。商賈充満シ、洛内ノ財貨タダ其ノ所ニ在リ」と特色づけて述べている。そしてそれなればこそ当然に焼失家屋を「翌朝ヨリ皆造作ス」と記して、その金持ちぶり・財力のほどを、いい換えれば数多くの有徳人が住んでいたというのである。このことは正しい記述だったことが昭和62=1987年に奇しくも31000枚もの銅銭——現在の200万円以上の価値にあたる——が、曲げ物とよばれる円筒形の薄板製の容器におさめられ、土中深くに埋められた状態でその地域から発見・証明されたわけである。

有徳人が住んでいたのはその地帯だけではない。平成11=1999年早々に、鞍馬の民家で石垣を補強するためにシュロの根株を掘りおこすと、子供の頭大の石が3個出てきた。それをのぞくと38462枚の中国銅銭——後漢の五銖銭から南宗の咸淳元宝までのもの——が現れた。ただ発見した人の家人がこれを無造作に取り出したので、上述のこと以上の考古学的な調査による事情はわからない。

ついでながら大化が日本の年号のはじまりであることは周知の通りであるが、14世紀後半から15世紀にかけて数多くの有徳人の出現を反映してなのか、徳の文字を持つ年号が集中的に登場してくる。建徳・永徳・至徳・嘉徳・明德・宝徳・享徳等々これである。実利主義・拝金主義という当時の世相のしからしめるものと考えたくなるのである。

貨幣の流通は個々人に対して貨幣の過不足を必然化し、それに対応してその黒字の個人と赤字のものとを媒介することを業とする金融業が発生するわけで、

室町時代は金融業を叢生させるほどまでに経済が貨幣化されだし、されたのである。

上述の『徒然草』60段に出てくる芋頭好きの僧が所有の300貫の金を京の人に預けたというが、その人とは恐らくその金融業にたずさわる人と思われる。以下に述べる借上<sup>カシアゲ</sup>か土倉・酒屋とよばれる業者のどれかであろう。他人の懐具合にまで首をつっ込んでほしくないことだが、これらの金融業者は貨幣の依託＝預金者に金利を支払っていたので、芋頭好きの僧は300貫プラス金利分とより沢山の芋頭を食べつくしたわけで、彼はますますうらやましい有徳人だったわけである。

鎌倉時代の金融業に借上がある。常識にしたがえばカリアゲが正しい筈なのに、なぜか根拠は不明ながらカシアゲとよむのである。不可思議なことである。この借上の金融業者が室町時代に次に述べるような改称しての金融業を営むのである。

①土倉<sup>ドソウ</sup> 取扱うものが担保つきでの貸金であるので、提出される担保品を保管する義務があり、これらを無事に風水火盗の害から守るために頑丈な土壁をもつ営業用の倉＝蔵が必要であり、それをそなえていたところから、これに着目しての名称が土倉なのである。洛中洛外図の中にはその面影をしのばせるものがある。

②酒屋<sup>サカヤ</sup> 庶民の嗜好・必須的欲求品の酒で巨利を得、これで貸金業を営んだという由来にもとづく名称である。同系列のものに味噌屋とよばれるものもあった。これは少数派で規模も小さかった。しかしこれによって日本人の食事時の不可欠のものとしての味噌汁の歴史の古さに驚く。とまれ以下ではこれらを代表するものとして土倉をとり上げることにする。幕府は財政をこれからの納税によりかかり、本格的貨幣経済に対応した。朝鮮使節（回礼使）の通訳・尹仁甫が京都での將軍家の見聞を「国二府庫ナシ。タダ富人（土倉？）ヲシテ支持セシム」（『世宗莊憲大王実録』）と述べている。

③日銭屋<sup>ヒゼニヤ</sup> 土倉とは区別され異質の金貸しである。というのは差し出すべき

担保物品すらももたない社会底辺のその日暮らしの貧民を相手に営業するもので、土倉等の既述業者と比較して、朝に貸付け夕に利子つきで返済させるという1日単位での取引であって、したがって高金利を要求することになる。

#### 四 合銭・利倍法・長祿徳政令

土倉は本来的にはとでもいうか、その出発点では自己資本を元手に営業した。彼等の誰もがより多くの貨幣＝収益をあげて有徳人とよばれる名士になりたいとの願望をもち、そのために営業の自己資本という枠・限界を破りたいと願った。一人の智者があってその制限を破る方法に考えつくわけである。他人の持つ貨幣を導入することによってこの制限を克服し、より多くの資金でより多くの収益を上げる道を開拓したのである。自己資本のみの営業のノン・バンクから、他人の貨幣を導入するバンクへと質的転換を果すわけである。

当時の金利は2<sup>モンコ</sup>文子・3<sup>モンコ</sup>文子と呼んだ。現在日歩5銭といえ、元本100円に  
対し日に5銭の利子であることを意味する——とはいえ日歩なる言葉も死語化  
しつつあるようだ——と同様に、元本100文に  
対し月に2文の支払い利子を2文子という。室町時代といえ徳政令・徳政令といえ室町時代と思われるほど  
までに、再三再四幕府によって徳政令が頻発された時代である。徳政令が出ると、それ以前の全貸借関係は原則として御破算・帳消し、つまり貸借取引が無かったものとされてしまう。しかし2文子での貨幣の貸借はこの徳政令のもとにあっても、本来的にその対象外扱いをうける公共的良心的利子率として公認されていた。したがって二文子の取引は徳政令の対象外だったわけである。このよう  
なわけで小<sup>コガネ</sup>金をもつ社寺は堂々と2文子の利率で金貸しのアルバイトをしていた。

利発な土倉業者はこれに着目して、社寺や庶民から2文子という利子を支払って金を預り（預金業務）、これを7文子・8文子で貸出（貸付業務）して利鞘をかせぎノン・バンクとしての自己資本の限界を破って預金業務と貸付業務とを行う実質的バンクとなって収益を増大させた。他方、社寺の方とはいえなに

もせずに同じ収益だけが土倉から得られるわけで、こんな結構なことはないわけである。くどいことながら上述『徒然草』60段に登場の僧侶が300貫の金を預けた京の人とは、恐らくバンクとしての土倉だったと思われ、したがって毎月2文子の利子がつけられたはずである。したがって僧の貨幣は300貫<sup>プラス</sup>+2文子<sup>カケル</sup>×預金期間となる。それほど彼は300貫以上の芋頭をたべた!!

2文子という合法的利率が登場したのでここで利率について若干の考察をしておこう。古代日本において、<sup>タネモミ</sup>種粍の実物貸付にともなう<sup>スイコ</sup>出挙利率は「雑令」19で、貸付期間60日では元本の8分の1以下、同480日=1年4ヶ月で同10割以下と規定されている。複利計算は禁止されている。因に雑令とは律令の令についての編目の1つであって、どの編目にも入らぬものを一括して集めたもののことである。現存するものでは養老令の雑令が最古。宝龜10=779年10月には上記規定の遵守を命じている。

この頃は官=上からの強行的貨幣流通の時代でもあり、律令政府は貨幣流通の促進のため貨幣使用に力点をおいた。私出挙が暴利を貪ったのでこれを禁止するや、貨幣の貸付形式をとって出挙の実体をカムフラージュしたりもした。

貨幣貸借が盛んになると、元来の出挙を財務出挙、貨幣での貸付を錢財出挙・利錢出挙とよび区別した。この貨幣の利子つき貸借も雑令19の規定が適用された。このことから年100パーセントが利子の限界という慣習法としての利倍法なるものが成立したように思われる。これは「<sup>コキンハット</sup>古今法度」として認識され、これをうけて公家法・武家法でも承認された。

かくて2文子=年24パーセントは公共性のあるものとして公認され、本来的には徳政令の対象外のものとなった。貸付利子の8文子=年96パーセント・7文子=年84パーセントの利率も古今法度的合法的利率と判定された。ただし旧暦では閏月の入る年13ヶ月の年もあり、8文子では104パーセントとなって古今法度から外れることになる。7文子は同条件下でも91パーセントどまりで合法となる。換言すれば土倉では閏月の有無で利率を8文子・7文子のいずれかを選択したのである。これは良心的土倉の場合であって、実際・一般的には悪



智恵の限りをつくしてより多くの利子をむさぼったものと思われる。蛇足ながら。

このように土倉はひろく一般的第三者から利子を支払って貨幣を取入れ、ノン・バンクからバンクになるのだが、この他人の貨幣を利払いによって蒐集しそれを貸付資本にすることを合銭とよんだ。この文字のよみは人によって、アイセン・アイゼン・ガッセン!?などとよんでいるが、ここではゴーセンと称することにする。研究者の追求にもかかわらず「合銭」の当時における訓よみを示す文献が見当たらないようである。

もとより合銭という金融現象・事実のあったことは確かである。長禄元=1457年12月5日に出された長禄徳政令がその証拠である。それは徳政の対象として「諸土倉・酒屋・日銭屋等合銭事」と規定しているからである。

長禄徳政令発布の背景事情にふれてみよう。この年の10月から<sup>ニシノオカ</sup>西岡衆——京都西部の松尾・<sup>オオエ</sup>大枝・桂・大原野・<sup>ムコウマチ</sup>向日町・久世・長岡等に住む人々——を中心にする農民が勝手に土倉を襲って質物を取りもどし証文を破棄した。私徳政である。目的を果たした彼等一同は11月末までには解散してわが家に帰っていた。彼等の解散を見とどけてからとでもいうか、とにかく出しおくれの証文のように出された徳政令がこの長禄令なのである。

徳政令の内容は私徳政が破棄しえなかったもの、まだ残存している合銭の貸借もこれを本令によって破棄されたものとする。ついでに土倉は<sup>サツキユウ</sup>早急に<sup>コウミョウ</sup>銭主（合銭への出資者・預金者）の交名=氏名と金額とを書面を出し、その金額の10分の1を幕府に納めよ——ここからこれを分一徳政令という——と命じる。その場合には、合銭のための預金はそのまま土倉のものとなる。

他方、銭主=預金者もその金額の5分の1を幕府に納めよ。さすればその債権は保証される。そして証文通りにその返済を土倉に催促せよ。上記の銭の納入がなければ、その預金は土倉のものとする。

以上が長禄徳政令の内容である。どちらに転んでも貨幣が入手できるという幕府にとって好都合なもので、この悪智恵に驚くのだが、このような奸知を絞り

出さなければならないまでに幕府は財政に窮していたということを知るとともに、それほどまでに貨幣万能の世になっていたことをも知ることができるのである。もしも徳政令によって土倉・錢主の両方から手続をすませた場合、一体全体幕府はどのようにするのが気になる。その合錢への預金額を切半せよとでもいうのだろうか。因にこの徳政令は、社寺等が預金利子として受取る、そしてそれまで徳政令の対象外とした2文子の慣例までも無視していることに留意ねがいたい。

## 五 ゴールドスミス

ロンドン塔の名称は夏目漱石の短篇『<sup>ロンドン</sup>倫敦塔』の存在もあって、わが国では周知のものである。名称のみではない。それにまつわる悲劇の塔としても知られている。実は造幣マンには常識なのだが、1300年以降1811年まで塔内の一角にイギリスの造幣局が設置されていたので、職業柄、極めて頑丈な金庫をそなえていた。

中世のロンドンでは白昼でも強盗が出没するような、また降雨があれば道路は泥道化し、その泥道の泥をさけるために男までもハイヒール靴が必要であり、ウツカリすると窓から道路上へのお虎子<sup>マル</sup>内容物の放棄があるなど、現在では考えられない治安状態の都市だったようである。特に強盗の横行に困る商人は所有の金銀貨・金銀製品<sup>タグイ</sup>の類をロンドン塔の上述した金庫に預けてその安全の確保をはかった。

1641年のこと、英国王チャールズ一世が対スコットランド戦争費用のために、突然にロンドン塔内の造幣局金庫が預かっている金銀の貨幣・製品を差押えて使ってしまったという。12万ポンドとも13万ポンドともいう。これに驚いた市民は当然ながら早々にロンドン塔の金庫から、次善と思える必ず営業用の金庫をもつ金細工師ことゴールドスミスの金庫へそれら金銀を預け換えた。

商人＝市民から金銀貨を預かったゴールドスミスは新たに以下の収入を得ることになる。

①保管料——当然にして正当な収入である。

②作為的收入（イ）——当時の貨幣は計量された単位量の金銀塊を、上下から極印を圧力で印刻するハンマード・コインであった。いわゆる手仕事によるものであって、機械づくり＝ミルド・コインのように個片が量的・形態的に画一化されてはいず、製造直後でさえも誤差があるのは不可避である。ましてや摩滅不可避の社会に流通しているものにおいてや。ここでゴールドスミスは非合法とはいえ意識的に最小＝最軽量のコインに合わせて良質コインを削り盗っては利益をあげるわけである。山本周五郎の作品『さぶ』ではこの非合性をさけるために、革袋の中で小判同志をブツ付けて金粉という形で収益をあげる両替店の裏作業を叙述している。

チャールズ2世がミルド・コイン製造法採用の枢密院令を出したのが1661年で、実際にミルド・コインが製造され出したのが30年以上かかったという。造幣局員の機械による失業等問題で反対したからである。

③作為的收入（ロ）——ゴールドスミスは店舗に自然的に流入するコインを待つのではなく、従弟を動員して積極的に良貨を集め、これを最小＝軽量のコインを基準に削り盗るのである。更には商人の会計員に良貨の預け入れをすすめるという行動もとった。それには削り盗りの収益の一部を与えて会計員の行動を促進した。ただしこの収益には良貨の存在量という厳たる壁がある。

④日常的体験からの法則発見による収入——当然のことながらゴールドスミスに金銀貨を預け・引出す＝取引する人は複数人である。預ける人もあれば逆に引出す人もあるわけで、預り金の引出し＝支払いのために預り金の全金額を常に支払い用に準備する必要は全くない。総預金の一部のみを支払用に準備しておけば、通常の引出しに十分に対応できることが日常経験から明白になる。それ以外の預金は第三者に貸付けて収益を得ることが可能になる。この収益には既述の良貨の場合のような壁はない。

総預金のうち、引出しに対応するための現金準備を  $x$  とすれば、 $1-x$ ＝残高をまるまる貸金＝貸付けに活用できるとの日常の営業体験的法則を最初に発見し

たのがわが（＝イギリスの）ゴールドスミスであるということから、この法則をゴールドスミスの原理＝金匠原理とよび、これが近代金融理論のもとを築いたという。英国が体系的な経済学の祖国——アダム・スミス、D・リカードウの名をあげるまでもあるまい——であるということもあって、ゴールドスミスの原理はそのまま現代世界で公認されて定説となっている。

100 ポンドの預金があり、その 10 パーセントが引出しに対応する準備金率とすれば  $£100 - £10 = £90$  の 90 ポンドを貸付けて利殖できるというのがゴールドスミスの原理である。この原理を近代金融理論では支払準備率の原理といいかえる。そして支払準備率の原理を発想を改めて適用し、全預金 100 ポンドそのものを支払準備とすると、総預金量は計算上で 1000 ポンドであって、その 10 パーセントが上の全預金の 100 ポンドにあたるのである。かくて  $£1000 - £100 = £900$  の 900 ポンドが貸付可能ということになる。90 ポンドから 900 ポンドに貸付可能金が増大した＝無から有が生じたということで、そして利益が大になるということで、これを信用創造の原理という。ただしこのことが可能になるためには、債権・債務の相殺＝<sup>ソウサイ</sup>キャッシュレス取引が成立するような全経済のバランスの確立されていることが必要である。

ゴールドスミスは既述の収入をうる方法の④において述べたように、預金引出しに対応する現金準備金以上＝以外の貨幣を、預金者には無断で活用して収益をあげ入手したのであるが、「悪事千里を走る」であってやがてこの秘密がばれるに及び、預金者からの批判を逃れるために、その収益のなかから事後的にようやくやっとな預金利子を支払うようになるわけである。

ゴールドスミスの行動に対し、わが土倉は既述のように最初から積極的に 2 文子の利子つきで預金（＝預金業務）をつのり、7～8 文子で貸付業務を行うという、ゴールドスミス同様に預金業務・貸付業務＝近代銀行業務を実質的に行っていたわけである。ゴールドスミスの方は無断流用という悪事がばれて周知になるまで、ほおかぶりして知らぬ顔の半兵衛をきめこみ、逆に悪事がバレるまで保管料をとって貨幣を預かるという大迂回しての後に、やっとなしぶしづ利子を

つけるにいたった。土倉はこの点において実に公明正大というか正直であり直截的合理的でもあった。

預金なのであるから錢主の要求があれば滞りなく返すのは、ゴールドスミスも土倉も全く同様であるから、上述の  $1-x$  に示される原理を土倉もゴールドスミス同様に体験として知っていたと考えても当然であろう。ただ両者の差異は、土倉の 15 世紀存在とゴールドスミスの 17 世紀存在という時間差、それに伴う科学的学問的思考水準＝経済学的水準の必然的差＝論文的記述文献の有無という結果を生じた。

なおゴールドスミスの原理は、その後の西欧における経済史研究の成果として、中世イタリアはベネチア・フィレンツェ・ジェノバ等の銀行家の既知のところであることを明かにした。イタリア銀行家が知っていたという点では土倉と大差はないわけであるが、彼等の認識は 15 世紀の後半であって土倉のそれはより早く 15 世紀前半であった。この誇るべき土倉の存在は室町時代の貨幣経済が世界的水準をゆくという高度の質を明示するものであろう。なおイタリアはフィレンツェの南にある円形の石畳のカンポ広場で有名なシエナに世界最古と自称する銀行があるが、これは中世の旅人相手の単純な金融業者というのが実態である。

## 六 貨幣流通の全国化

本節では第 5 節において展開した室町時代の合銭に象徴される高度の質に対しての量という点についての考察をすすめたい。この考察にあたり、自己宣伝・自己満足・身<sup>ミビイキ</sup>鼯<sup>イキ</sup>の批判・疑念をさけるために、あえて中立ないし批判的とも思える外国人＝韓国人の見聞記・旅行記によって論究を進めたい。

室町時代には多くの李氏朝鮮（古代朝鮮に対しての通称）から文人・高級官僚等の知識人が来日して当時の日本事情についての記録を残している。それらのなかには自国と対比しつつ日本の観察・評価を冷静に行っているものもある。

和寇というと日本人の海賊という印象を与えるが、実体は五島列島をふくむ

松浦諸島の支配者としての中国人・王直が総指揮者であった海賊である。応永26=1419年に朝鮮国軍が突然に和寇の根拠地として対馬に侵入・上陸してきた。これを対馬の宋氏・九州の探題たる渋川義俊や小貳満貞らが迎えうち撃退した。翌27年に和解使節として宋希環が来日した。その時の日本での見聞を帰国後『老松堂日本行録』と題する書物として書き上げた。

同書によると摂津の尼崎で三毛作——米・大麦か小麦・蕎麦を同一田地で1年間に収穫する——の事実を知って驚き灌水・排水技術の高度さにも感服し、その代表物として揚水車の模型を作って帰国したらしい。彼の驚愕の如何なるものかがわかるというものである。三毛作を実現する技術水準の高さは農業に限ったものではない。15世紀には備前壺・千種鉄・備前表・阿波の藍等の産物を商品化させ畿内に流入させたり、堺・博多が貿易都市として発達する等、経済全体の水準が上昇したことは多言無用である。ところでわれわれは尼崎といえば兵庫県に所属する都市であると認識している。宋希環の「摂津の尼崎」との記述を見て誤記？ではと一瞬思った。摂津=大坂と思い込んでいる者にとっては無理からぬことであろう。決して誤記どころか正確そのものなのである。実は将来において大久保利通は大阪が東京よりも盛大になることを防ぐ方法として、篠山をふくむ旧丹波国を二分して兵庫県に加えると同時に、摂津の国の最も肥沃な部分——現伊丹・<sup>イタミ</sup>尼崎・西宮・神戸等をふくむ——を兵庫県に編入した。利通の陰謀といえそうである。

それはそれとして、自国と比較する宋希環は日本に乞食の多いことを日本のマイナスとして指摘している。このように直接に食料生産にたずさわることもなく、仕事ももたずに食べるという乞食の存在は、同時に社会が余裕・流動性・躍動性をもつということでもあって単なるマイナスではない。寛正2=1461年の大飢饉で8万人をこえる餓死者が京都に出たといわれているが、その事は室町時代の生産水準・経済余力の存在を同時に示すものである。ある原因でこの余力がなくなってイの一番に彼等が死亡したものにすぎない。乞食の存在量は経済余力を示すバロメーターである。ただし自国の乞食と比較しての不思議さ

で、宋希璟は日本の乞食は食物ではなくて貨幣を求めていると記述している。当然のことであって室町時代の貨幣経済の作用が乞食にまで、ということは隅々にまで及んでいるということである。

来日のインテリの一人に使節として渡来した朴瑞生<sup>パクソセン</sup>がある。来日は永享元＝1429年のことである。彼の日本見聞は宋希璟の場合のように独立の書としてではなく、国王への帰朝報告書として提出されたものが『世宗荘憲大王実録』に収録されているのである。

朴いわく、日本では錢の使用は布米の使用程度以上のものがある。ここにいう布米の使用とは朝鮮の現状であって、彼の地では布米が貨幣機能を代行していた。朴報告にもどるが、日本では旅行者は錢婚<sup>ゼニサン</sup>——必要と思われる錢を紐に通したもの——をもつだけで、韓国のように燃料も食糧も持たない。錢さえあれば宿に泊って食事することもできる。馬に乗って旅行することもできる。河があれば錢を出して橋を渡ることができる。この錢は橋の修理費にあてられる。だから錢の流通は広範囲にわたるものであって、人は食糧・燃料等の重いものを背負って遠くへ行く苦勞を免れている、と。

日本における渡橋時に渡橋代として錢を支出した名残りをいまに伝えるものは、京都は向日町<sup>ムコウマチ</sup>の西に流れる小畑川<sup>オハタ</sup>に架けられている橋の名が一文橋であって、その昔渡橋代として錢1枚＝1文を支払ったことを示している。平成5＝1993年ころの話である。京都・奈良をまたぐ学研都市を南北に縦断する京奈和自動車道に木津川を渡る城陽－田辺北インターチェンジがあり、無料の道をたどって迂回するよりもこの木津川橋を渡る方が約5キロも近くで便利ということもあり、ただし渡橋代が100円ということから地元タクシー会社でこれを百円橋とよんだという。一文橋の現代版というところだ。

## 七 自国用の異国貨幣

世界的水準をゆく質と量をもつ貨幣経済が、上述のように室町時代の日本に存在していたということは驚くべき事実なのだが、その上にもう一つの驚くべ



き事実がこれに加わるのである。この貨幣経済の実現の陰の功労者とでもいいうる貨幣そのものが、実はメイド・イン・ジャパンならぬメイド・イン・チャイナだったのだ。正確には小量の皇朝錢といわれる自国の和同・万年・神功・隆平の諸錢と偽造錢がこれにまざっていた。

一見、これは世にいう他人の<sup>フンドシ</sup>褌で相撲をとっているかのようなのである。が実際には当時の金銀高・銅安の中国市場により、日本より金銀輸出の見返りとしての銅錢輸入なのであって、対価を支払っており決して他人の褌などではない。とまれ日本社会を中国錢がわが世とばかりに全国的に堂々と流通したわけで、それによって室町時代の貨幣経済の大発展が営まれたわけである。外国＝異国貨幣の全面的流通・依存という大変珍しい現象である。ただし類例が全くないわけではない。

最近の若干例をあげておこう。パナマでは 1914 年に完成をみた運河の建設時から、その周辺でドルが使用されだした。紙幣はドル札・コインは自国通貨のバルボアだが、1 バルボア＝1 ドルと等価の故に人々はドルをバルボアとよんだにすぎないのが実体である。

極く最近これとは趣の違うドルの使用が発生した。1983 年、香港の中国への返還交渉の本格化で貨幣市場の動揺を押えるため、1 ドルを 7.4 ホンコンドルに固定した。1991 年、アルゼンチンがハイパーインフレ対策として 1 ペソ＝1 ドルとして両貨幣を流通させた。このような一国のインフレ率が上昇すると、価値貯蔵・計算単位・取引手段として国内貨幣から国外貨幣への典型的な移行が発生する。このプロセスはダラリゼーション Dollarization（ドル化）とよんだ。

2000 年 9 月、中南米のエクアドルでは自国経済安定のため通貨スクレをドルに変えた。2001 年 1 月、サンサルバドルも同様にドルを通貨として経済の安定をはかった。この流れはグアテマラ等の周辺国にもひろまった。パナマの経済が安定しているのもダラリゼーションのおかげといえなくもない。

としても室町時代の日本における中国錢は日本経済の安定だけではなく、それを上回る拡大再生産を実現したわけで、ましてやインフレ対策としてのもの



などではなかった。中国銭はまさに極めてユニークな優等生として日本で働いたといわなくてはならない。

しかしここに大きな疑問が生じる。それにしてもなぜ室町幕府が自国貨幣を自鑄しなかったのかということである。当時の科学・技術水準からいっても、素材となる銅さえ輸入すれば容易に自鑄可能だった。その自鑄をしなかった理由の一つは、自鑄貨を幕府が全国に無条件で流通させるに足る充分にして絶対的な権力に欠けていたことである。歴代の幕府にあって最弱のものは室町幕府だったことは既に言及済みである。そのピークをなすものは歴代の全 15 代の將軍のうち 3 代目の義満時代であって、以後は緩急の差はあれ、下降一途であって単なる飾りもの化した。自分の支配地も大内・細川・畠山・山名・斯波等の管領級の諸氏の所領に毛の生えた程度にすぎなかった。

幕府の実力で自鑄貨を流通させるよりは明という中国皇帝の権威の方が貨幣をスムーズに流通させることができるわけで、そのこともあって幕府は中国銅銭の独占的輸入によって自鑄同然の鑄造益同様の収益を入手するとの計算でこれに対応した。義満が明皇帝に臣下の礼をとった——その象徴は文書に明の年号を記載すること——理由の一つで、このことは達成された。

## 八 必要貨幣量の絶対的不足

中国銭が日本経済の発展にペースを合わせて順調に流入すればなんの問題も発生しない。ところが実際には無限大視されていた中国銅山も枯渇しはじめたこと、中国東北部に後の清国勃興による明＝中国の政情の不安定等の理由によって銅銭鑄造量が激減＝輸入量の減少が生じた。ために経済の要求貨幣量と流入量をふくめての存在貨幣量との間に貨幣の不足というギャップが生じた。しかし経済は不断に動いているのである。その結果として、貨幣の絶対不足量をカバーするためにその分だけ既存貨幣の酷使、上品に表現すればその流通速度の加速によって対応せざるをえないわけである。その当然の結果として発生したものが、不完全貨幣の続出である。摩滅して貨幣の鑄銘すら読めないためにス

りとよばれるもの・2つに割れたワレとよばれるもの・部分的に割れているカケとよばれるものである。この不完全貨幣の大量発生にともなう貨幣の絶対的不足に乗じての偽造貨が登場することになる。

その一つが多治木銭とよばれるものである。九州は大隅国で鑄造されたもので、明銭の模倣銭であり、その裏面に多・治・木のいずれかの1文字が鑄銘としてあるところから、これらが多治木銭と称されるようになった。もう一つの模倣銭は堺銭とよばれるものである。この堺とは大阪府の堺のことであって、その二セ銅銭の存在は、日本初の撰銭令——貨幣を差別して良貨だけを選びとることを禁止にする法令——といわれる文明 17=1485 年の大内氏の条々に偽造銭として堺銭を指摘している。もう一つの偽造銭に島銭とよばれるものがあるが、多くの人々の探求にもかかわらず、その鑄造地については未詳である。

平成 16=2004 年のこと、中国からの手紙の中から偽造の平成 13 年銘の 500 円貨が発見された。それ以降平成 17 年を中心に、中国産の偽 500 円貨が九州を中心に全国で 1590 枚——一説では 19600 枚ともいう——が発見された。それらは商品入手時に釣銭を入手するために行使したり、郵便局の ATM（現金出納機）に入れて他所の ATM から日本銀行券＝紙幣で受取るという方法で正式通貨入手に活用された。某新聞には「グレシャムの法則」と題して「悪貨も良貨も取り入れる ATM」とこの事態を皮肉っていた。平成の偽中国銭＝偽渡来銭の日本流入である。日本製の偽銭ではなくて中国製それという点が新しく、これは現在での両国経済力の差によるものであろうか。

大内撰銭令として撰銭という言葉が出たので、撰銭ということについて若干のコメントを述べておきたい。一国政府はコインの製造においてつねに良貨を製造すべく努力している。日本の造幣局では、聞くところによると、製造されたコインをベルト上に流し、それを両側から 6 人が一定時間——15 分とか——交替で不良品を見つけては排除するという。その厳密さは 12 の目をまめがれたコインの桁外れケタハズの市場価格の高価さによって証明される。しかし一般化していえば相対的に良貨に対する悪貨も混在していると考えても許されるであろう。こ

れを前提にしての話だが、政権が圧力を加えなければ貨幣のより好み・取捨選択をするのが撰銭，つまり取手優先なのである。これに対して同じように通用するのならば先ずクシャクシャになっている紙幣や悪貨から行使するのが，あの有名な「悪貨は良貨を駆逐する」のグレシャムの法則の作用する世界であって，政権の圧力の加わらない出手優先なのである。したがって撰銭とグレシャム法則とは別物ではなくて，同一物・表裏関係にあるものといはなくてはならない。スリ・ワレ・カケの欠損・不完全貨の出現を余儀なくする室町時代の貨幣経済における通貨量の絶対不足は，ますますその度を深めてゆくのだが，時の政権たる室町幕府はこれに対処するに，根本的な対処ではなくて応急措置とでもいえる撰銭令——受取拒否の可能貨幣以外のものは無条件でこれを受取れというもの——の発布を以ってした。ここに足利幕府といえは撰銭令・撰銭令といえは足利幕府といえるような，あたかも専売特許でも持っているかのように撰銭令を頻発するのである。

撰銭令の最初は明応 9=1500 年に issuance，以降十数回をかぞえる。明応撰銭令で，以降撰銭の対象となる打平・京銭——南京=中国製の銭の意——のことを「日本新鑄料足」（『幕府法追加 320 条・334 条』）とよぶ。永正 2=1505 年の撰銭料を一例としてみよう。

定む 撰銭の事 京銭。打平などに限る。

右，唐銭においては，善悪を謂はず，小瑕を求めず，悉く以て諸人相互に取り用うべし。次に悪銭売買の事。同じく停止する上は，彼と云い是と云い，もし違反の輩あらば，その身を死罪に行ひ，私宅に至りては，結封せらるべきの由，仰せ下さるところ也。依て下知，件の如し（『中世法制資料集』第二巻「室町幕府法」）

違反者には死罪・財産は差押えるというような過酷なものは，それ以外で全幕府法にはないといっている。だがそれほどまで法の徹底がのぞまれていたと解すべきだろう。又銭の窃盗にも極刑が課せられた。鎌倉時代の寛喜 3=1231 年には銭 200 文の窃盗をもって罰する軽犯罪扱いであったものが，文亀元=1501

年の「政基公施引付」によれば「竊盜之儀過三錢者……可切棄事」つまり3錢切りの極刑に変化し、やがて1枚を盗っても斬殺という1錢切も出たといわれている。貨幣經濟の浸透の証拠であろう。

撰錢令が出るまでは均質の良貨の流通が当然視されていたが、各地の私鑄錢や酷使による精粗が明確になり、貶質貨幣・不完全貨幣をなんとかうまく押え<sup>セツツ</sup>ての以前のような精錢体制の再建・維持指向が撰錢令の本来的目的だったといえる。以後撰錢令に工夫を加えるのみならず新しい構想のもとにこの貨幣問題に対応し、これに解決の方向を示すようになるのだが、稿を改めてこれを論じることになりたい。